『教祖伝』探究（28）

よふぼくの目標数

前おやさと研究所長
深谷　忠一　*Chuichi Fukaya*

『稿本天理教教祖傳』147 頁に、次のようにあります。

このさきわたにそこにてハだん〳〵と
をふくよふきがみゑてあるぞや　　一五　59
たん〳〵とよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　　一五　60

と、多くの人々が、広い世界から親を慕うて寄り集まって来る有様を見抜き見通して、よふぼくの成人を待ち望まれた。

そこで先ず、よふぼくについて記されている全ての「おふでさき」を見てみますと、先ず、明治７年に執筆された第３号の 49 のお歌と 128 ～ 141 までの７首があります。その一連のお歌では、“ 多くの用木を作るのが神の思いであるから、これからは高山からも用材を見出して手入れをして用木を作る ” ことが言われています。

次いで明治８年執筆の第７号の 15 ～ 24 のお歌に、“ よふ木゛ ”、“ 木 ”、“ はしら ” 等の言葉があります。“ 多くの用木が必要であるから、谷底などに群生している木、真っ直ぐでない木なども雌雄を問わずに寄せ集めて、それを手入れして末代に続く国の柱に作り上げる ” と言われています。

そして、明治９年ご執筆の第 12 号の 14 ～ 17 では、“ よふ木の初めの一本がしっかりすれば、あとは末広がりにその数を増やせる ” と言われているように思われます。

そして、前述の『稿本天理教教祖傳』147 頁で引用されている明治 13 年ご執筆の第 15 号に、“ この先に出てくる多くの用木にこの世を始めた親が入り込んで働く ” と仰せられています。

さて、それでは、社会的地位（高山･谷底）を問わず、男女（雄松・雌松）を問わず、多くの用材を集めると言われますが、どれ位の数を集めることが目標なのでしょうか。

「おふでさき」第７号には、

よふ木゛でも一寸の事でハないからに
五十六十の人かずがほし　　七　23
このにんもいつ〳〵までもへらんよふ
まつだいつゝききれめなきよふ　　七　24

とあります。現在の状況で考えますと、この 50 ～ 60 人というのは、教会本部あるいは教団全体のよふぼく数にしては少なすぎますから、各教会の月次祭でのおつとめ奉仕者として必要な人数だと考えるのが妥当かも知れません。

教会での月次祭のおつとめを、座りづとめとておどり前半後半の三交代、それを一人一役でつとめるためには、おてふりに当たる人が６人〈男女３人ずつ〉× ３＝ 18 人、男鳴物が６人 × ３＝ 18 人、女鳴物が３人 × ３＝９人、地方が１人 × ３＝３人～３人 × ３＝９人の合計 48 人～ 54 人必要です。それに加えて、雅楽の楽人が、太鼓・小鼓・鞨鼓の打ちもの３人、箏・琵琶の弦楽器が２人、竜笛・篳篥・笙の管楽器で３～９人、合計８～ 12 人必要になりますから、総計で “ 五十六十の人かず ” を、各教会で揃えることが目標になるということです。そして、その人数が途切れないように、常に補充する努力が求められるということでしょう。

また、一方、明治 25 年１月 12 日の「おさしづ」には、

一席三名出して〳〵世界出し切るまで出すで。世界中すっきり繋いで了う。繋ぎ掛けたら一重にも二重にも繋ぐ。……日々さづけ〳〵の繋ぎやない。世界中の心の理を繋ぐのや。さあ二重にも三重にも繋ぐ。

とあります。

「おさしづ」においては、よふぼくは、50 ～ 60 人の規模ではなくて、世界中の人々の心を繋ぐために出来るだけ多くの人たちに “ さづけ ” を出す。その “ さづけ ” をいただいた人・よふぼくの輪で、世界中の人々の心を繋ぐと言われています。世界の人々の心を二重三重に繋ぐだけの数が必要であると言われるのです。また、それと共に “ 出し切る ” と、“ さづけ ” が渡される数にも切りがあると言われる。つまり、よふぼくの輩出も無制限ではないことも言われていると思えます。

そして、次に「みかぐらうた」を見てみますと、八下り目に、

八ツ　やまのなかへといりこんで　いしもたちきもみておいた
九ツ　このききらうかあのいしと　おもへどかみのむねしだい

と歌われています。親神は山の中の全ての木をむやみに伐り出されるのではなく、親神の思惑に沿う木を選んで伐り出されるということです。

明治 31 年 10 月１日の「おさしづ」にも、

世上から賢い者や、辨者と言うても、雇い入れる事出来んから、よう聞き分け。……種を蒔いたる年限からよふぼくという。さそうと言うて出来るものやない。しようと言うてさせるものやない。

とあるように、世界の全ての人間がよふぼくとして使われるのではないと言われるのです。

さて、それでは、現在の状況下で、よふぼくを最大限何人輩出することができるか。その物理的な可能性・限界を考えますと、今日、一日におさづけの理を拝戴できる人の数は最大で千人余。１年で 30 万人、10 年で 300 万人、100 年で 3,000 万人です。17 歳でおさづけの理を拝戴した人が全員 115 歳の長寿を全うするとして計算しても 100 年で皆入れ替わりますから、総計で 3,000 万人以上にはなりません。“ よふぼくとはおさづけの理を拝戴した人 ” との定義をすれば、3,000 万人が最大限のよふぼく数になるということです。

つまり、「多くの人々が、広い世界から親を慕うて寄り集まって来る有様……」と言われる多くとはどれ位かと申しますと、教会でのおつとめ奉仕者がよふぼくだと考えれば 50 ～ 60 人を揃えるのが目標。世界の心をつなぐ使命に焦点を当てれば､3,000 万人位のよふぼくを作ることが目標になるということです。

そして、両方の人数を総合的に考えれば、50 ～ 60 人のおつとめ奉仕者が揃う教会が国々所々に 50 ～ 60 万カ所設立されて、世界中でおつとめが勤められるようになれば、最大限 3,000 万人のよふぼく数になる。それで、全人類の陽気ぐらしを実現することになるのです。

「広い世界から親を慕うて寄り集まって来る」と言われることを漠然と受け止めているのではなく、個々の教会・個人でも具体的な人数目標を立てて周到によふぼくを生み、育てる努力をすることが、世界だすけを急き込まれるをやの思いに応える道だと思う次第です。